

今月のことば

心ほど
心まよはす
ものはない。
香樹院徳龍
「よき人のことば」
香樹院師の遺訓より

江戸期の真宗大谷派の学寮講師（僧侶育成機関の講師）、香樹院徳龍さんの言葉です。他に「心ほどしうとい分けのわからぬものはない」「心ほど自由にならぬものはない」とも。身につけた知識や気持ちの持ちようでは追いつかない、思い通りにならないものが、私たちの心というもののなにかもしれません。

夏の寺子屋文庫開放日

夏休み特別開放

8月4・7・21日

10:00~12:00

木曜日のWA つなぎサロン

10:30~12:00

8月6日 絵本のWA

8月20日 子育てのWA

8月27日 手帳のWA

14:00~17:00

自由来館



同朋会館一階広間を開放しています。
暑い日にも涼しい部屋でゆっくりと過ごせます。
どなたでも利用できますので、
お気軽にお立ち寄りください。

住職法話「煩（わづら）い悩む身」

必ず煩悩のこおりとけ すなわち菩提のみずとなる

親鸞聖人が本師と仰がれた曇鸞大師を讃えた高僧和讃の一節です。泥の中からしか蓮の花が咲かないように、煩悩があつて迷っている身だからこそ仏に救われる対象となるのだ、という驚きと感動が表わされています。

浄土真宗の僧侶は日頃必ず髪を剃るわけではありません。仏教では髪は毛はそもそも煩悩の象徴であり、僧侶は髪を落とすことで煩悩を断じ、そこで悟りを開いていきます。しかし、親鸞聖人は自らを臨終のその時まで煩悩から離れることができない「凡夫」だと捉え、煩悩を抱えたままで救われる道はないのか、たずねていかれました。私たち凡夫は煩悩がなかなかなくなっていくかない。SNSで「イイね」をもらいたい、誰かに評価されたい、そうして自分ではないことに惑わされていき、その煩悩が消えることがありません。煩悩を消して悟りを開くしかないなら、私には難しい。

そんななかで出あった曇鸞大師の教えはそんなことはない、修行する人もしない人もできない人も「ともに」救われる道があるのだ、私たちの患い悩む心こそが仏の救済を生むのだ、と説かれてあり、親鸞聖人はその言葉に深くうなずかれたのでしよう。

おみがき（第一水曜日）

八月五日 九時半から十四時頃

昼食にお弁当が出ます。

お盆を前に本堂の仏具を磨きます。

お手伝いいただける方は、八月三日

までにご連絡ください。

八月の同朋会はお休みです。

ぼうもりのひとりごと

夏休みの思い出。ラジオ体操、蝉の声、近所のプール、お墓参り、冷やしそうめん、夏祭りのお囃子、打ち上げ花火に蚊取り線香、登校日の反戦映画。二度と再び戦争の惨禍の起こることのないように、平和でのどかな夏休みが世界のすべての子どもたちの上にありますように。

世の中安穏なれ、仏法広まれ